



東九州支部報

第73号

公益社団法人日本山岳会東九州支部
2016年4月25日(月)発行



韓国山岳会蔚山支部との交流登山・韓国嶺南アルプスの高嶺山にて・3月21日(火)

目 次

支 部 活 動 報 告		私の無名山ガイドブック(60)	8
足立山(1月月例山行)	2	会務報告	9
五勇山・扇山(2月月例山行)	3	投稿・慰霊登山	9
郡岳(3月月例山行)	4	お知らせ	9
第2回青年部山行報告	4		
個人投稿		特別報告 韓国山岳会蔚山支部との交流 億山・高嶺山交流登山	10
より安全な登山のために(20)	5		
ペンリレー(20)「自然との出会いを求めて」	7	参加者一口感想	12
三角点と山城探訪シリーズ(17)	7	後記	16

足立山(507.8m)

1月月例山行報告

阿南寿範(9169)

平成28年1月17日(日)

《コースタイム》

妙見宮駐車場(9:15)→(10:12)稜線砲台山分(10:12)
→(10:23)妙見宮上宮(10:23)→(10:50)足立山(11:03)
→(11:20)妙見宮上宮(11:23)→(12:05)小文字山
(12:05)→(12:24)林道→(12:55)妙見宮駐車場

1月の月例山行は、福岡県北九州市にある足立山(別名:雲ヶ岳)である。海拔597.8mの足立山は、古くから北九州市民に親しみのある山として知られている。今回は自家用車4台に分乗して日帰り山行を行った。参加者は14名、朝7時に大分駅「上野の森口」に集合・出発。時間どおりに全員集合し予定通り出発した。大分ICより高速に乗り速見ICから椎田道路(一部一般道路)を抜け、小倉東ICで高速道路と別れ、登山口の妙見宮駐車場まで行く。(なぜか私の車だけが小倉南ICで降りたため、みんなを30分ほど待たせてしまった。)30分遅れで合流やれやれ、人数、概要ルートを確認、空模様あまりよくないので、計画通りに歩けないことを伝え、場合によっては途中で引き返すか、エスケーブルートを採用することになるかもしれないと伝えた。

どんよりと雲は垂れ込めてはいるが、雨はまだ降りだしてはいない。ここまで来た以上、やらずして退散はない。9時15分山頂に向かい出発、急坂が続きかなりきついアルバイトで約50分砲台山分に着く。この付近ではコンクリートで作られた大きな構造物跡がある。

(戦争時、関門海峡の敵艦隊を迎え撃つ砲台跡)ここから稜線を東に進み10分ほどで妙見宮上宮分岐に着



(足立山頂にて)

く。このあたりから、ガスが発生、下界の様子が確認

できなくなる。

急坂となり約30分で足立山の山頂到着。(一等三角点)景色はまったく望めない山頂。雨粒がポツリポツリと降り始めた。これからの計画を皆で相談。小文字山経由で下山することにした。

全員でカメラに収まり、15分後に小文字山方面に下山開始した。妙見宮上宮まで同じルートを引き返し、妙見宮上宮に立ち寄る組と、寄らない組に分かれて途中の稜線で打ち合うことになった。妙見宮上宮裏手から道は急降下風当たりの強い稜線は我々の行動を後押しした。進むこと約40分、小文字山に着いた。標高が低くなるとガスも薄くなり、眼下にはドーム屋根のある競輪場や工業地帯等が見えてきた。

小雨が大粒の雨になり、ここで皆雨具をつけて下山する。滑らないように注意しながら下山。林道に出てさらに市道を約20分歩き全員無事駐車場に着いた。雨は本降りとなった。

雨との格闘で、昼食もできていなかったため佐藤(秀)氏提案で、季節限定の「カキ小屋」に火鉢の上で生カキ焼いて食べ昼食とした。美味な食事を堪能したのち、ここで1月の月例山行は終了・解散とした。雨に降られての山行は、ちょっと物足りなかったが、参加された皆さんの協力のお陰で、事故もなく終了できたことは大変有意義なものであったと思います。

また、おまけの美味しい生カキを食べられたのはラッキーでした。参加された皆さまお疲れ様でした。参加者・星子貞夫、飯田勝之、佐藤秀二、岩崎真琴、松浦一幸、丹生浩司、久知良美登里、浅野総一、柳瀬里子、池辺明美、櫻井依里、河津英基、大渡崇夫、阿南寿範

五勇山(1662m)と 扇山(1661.7m)

2月月例山行報告

浅野総一(15201)

2月の月例山行計画は、九州脊梁山地の烏帽子岳、五勇山。初めての山を訪ねるチャンスと思い、参加した。6日(土)午前6時30分、JR大分駅を出発。参加者は計16人。車4台で戸次、竹田、高森を経て、国道265号で宮崎県椎葉村へ。深い谷を縫うように細い道が続き、平家落人伝説にふさわしい山里だった。

五勇山(1662m)を目指し、曇り空に雪が舞う菅野登山口を午前11時に出発。10分ほどで谷川の渡渉地点に着いた。谷にロープを張り渡してはあがるが、足を置く岩の間隔が広く、湿って滑りやすく見えた。CLの佐藤秀二さんが持参したザイルを谷に張り、全員が通過。この渡渉には、かなり時間を要した。



(五勇山頂にて)

上りの途中で昼食を取り、午後2時20分ごろ五勇山の山頂着。さらに、雪を被ったシャクナゲの群生地を通り、烏帽子岳手前のピークへ。しかし、日没が早いので「烏帽子岳は次の機会に」と午後3時30分ごろ下山を開始。復路の谷川渡渉では体がふらつき、バランスの悪さを痛感したが、佐藤CLのザイル捌きに助けられた。午後5時50分ごろ菅野登山口着。

椎葉村は人口2785人(2月1日現在)、山林が96%を占める。特産品は乾椎茸、そば、干し筍など。特産品の一つ、菜豆腐(なとうふ)は菜の花、ニンジン、大根葉などを入れた豆腐で、椎葉村では昔から結婚式や法事などで用いられたという(椎葉村観光協会の資料から)。

泊まった民宿「龍神館」の夕食は、猪肉入りのそば、鹿肉の佃煮、ヤマメの塩焼き、椎茸の煮物、菜豆腐など。山の恵みを生かす知恵が感じられた。

2日目の7日(日)は打って変わって晴天に恵まれ、みんなの表情も明るかった。目的地は九州百名山の扇山(1661m)。車2台に分乗し、急峻な山の斜面に造られた林道を、路上の落石を慎重に避けながら上った。市房山を望む松木登山口を午前9時に出発し、約1時間で扇山小屋に到着。小屋は基礎が老朽化し、立ち入り禁止になっていた。さらに、シャクナゲが群生するピークを通り、午前10時30分ごろ扇山山頂着。下界は北朝鮮の「ミサイル発射」で持ち切りの頃だったが、山上は360度の展望に沸き、晴れた日の

(扇山山頂にて)



雪の山の素晴らしさを味わうことができた。ピストンで午前11時50分ごろ松木登山口着。

下山後、椎葉村物産センター「平家本陣」で昼食、現地解散。午後6時ごろ大分市着。2日間、長距離の運転を担っていただいた方々、ありがとうございました。

参加者(順不同)・佐藤秀二(CL・車)、飯田勝之(車)、松浦一幸、丹生浩司(車)、久知良美登里、賀来和子、清水道江、清水久美子、藤澤あさみ、浅野総一、大渡崇夫、岩崎真琴、松田信子、芝田寿一(車)、宮原照昭、遠江洋子

郡岳(825.8m)

3月月例山行報告

清水久美子(会友178)

3月27日、長崎県大村市にある九州百名山のひとつでもある郡岳へ。ルートは南登山口から頂上を目指し、西登山口に下りる周回コース。もうすぐ、4月になるかという時期だが今日は外の空気が冷たい。今回の山行は参加人数が22名と多かったことから3チームに分かれて登ることに。

今回はリーダーの安東さんからの提案もあり読図をしつつ登山に臨むことに。野岳湖キャンプ場の駐車場を出発し、湖の周りの舗装道路を歩くこと約40分郡岳南登山口に到着。各自衣類調整等を行い、チームごとに出発。地図にある送電線下の開けた道を通り、登山道へ。登山道は林の中で涼しく、山頂を目指しジグザグに登っていくので急登もほとんどなく比較的緩やかで歩きやすい道が続く。

休憩をはさみつつ歩くこと約1時間10分で郡岳山
(郡岳山頂にて)



頂に到着。天気も良かったので、頂上からの展望は良好。先ほど歩いてきた野岳湖、九州のマッターホルンといわれる虚空蔵山など近隣の山々を見ることができた。頂上で昼食をとり、今度は坊岩を目指して西登山口へ下山開始し、出発から約15分ほどで坊岩に到着。坊岩は、高所恐怖症の私にとっては少しスリリングな場所ではあったが、岩壁から抜群の展望を望むことができた。下りは上りに比べてやや傾斜がきついところもあったが、頂上を出発してから約1時間ほどで西登山口へ到着。そこから舗装道路を約25分てくてく歩き、スタートした駐車場に到着。

到着後、リーダーの安東さんから登山中に遭遇する事故や怪我の時の対処方法についての講義があり、百聞は一見に如かずということで、ロープを使ってハーネスのようにして怪我をした人を担いだり、カラビナでザックを連結させシュリングで持ち手を作り担架を作ったりなどと実際に目の前で実演していただき大変勉強になりました。登山中は想定外の事態に対応できるように最低限の装備を準備する必要があること、そしてその持っている装備を使いこなせる知識はもちろん、装備を創意工夫し上手く利用することで突然のアクシデントにも対処できるということを知ることができ、大変良い山行でした。



(郡岳三角点)

参加者…CL 安東、牧野信江、阿部恵子、藤澤あさみ、清水道枝、清水久美子、若月美智子、今川三弘、賀来和子、柴田寿一、池辺明美、丹生浩司、久知良美登里、宮原照昭、松浦一幸、浅野総一、久保洋一、佐藤秀二、飯田修三、

第2回青年部山行報告

扇山～伽藍岳

田所寿朗(14024)

(日付) 2016年1月24日
(ルート) 扇山→さくら園→大平山→内山→伽藍岳→うさぎ落とし→扇山さくら園(計画ルート)

当初、傾山を計画していたが天候不良により伽藍岳(別府)に変更となった。この日は数十年に一度の寒波に見舞われ夜間は大分の平野部でも薄っすらと雪が積もる日だった。交通渋滞と交通事故を避ける為、かなり早めに家を出た。別大国道の温度表示で-4℃。



別府に入ると道路には雪が積もり横断道路では坂を上れなくなった車がちらほらと見受けられる。

集合場所の別府自衛隊駐屯地前のパーキングエリア

は写真のとおり。集合時間は8:00であったが7:00すぎに到着してしまった。集合時間が近づいてきたが他のメンバーは現れない。電話すると渋滞に巻き込まれたとの事で約1時間遅れで集合できた。

登山口はここからすぐの場所で扇山桜の園から登る。桜並木の公園内を通り抜け大平山の防火帯に沿って登る。毎度のことながら傾斜がきつい。脹脛がパンパンになる。こんな時、私は横向きになったり、がに股になったりしてひらめ筋を休ませる。今日はストックを忘れてきたのが大失敗。いつも以上にきつい。



私がストックを購入したきっかけは大平山があまりにもきつかったからなのだが、その大平山を登るのにストックを忘れてきてしまった。登っていると別府中に響き渡るサイレンの音。この時間は覚えていて9:45だった。横断道路沿いの海地獄の少し下の所から黒い煙が上がっている。どうやら火事のようなだ。あれ?前にもこんな事があったような気がする。

登り始めて1時間35分で大平山山頂に到着。ここで軽く食事を済ませて伽藍岳目指して出発するが、今日は伽藍岳どころか内山も無理かもしれない。12:00の時点で判断する事にした。ここからのルートは林の中を尾根に沿って内山方面に向かう。とても急な登りでロープを設置されているのだが、雪に埋まって口

ープが見当たらない。ストックを忘れた私は立って歩



(扇山頂で)

くことが出来ない。雪を掻き分けながら這って登る。こんな時に頭の中では井上陽水の「夢の中で」がループする。探し物は何ですか～。ロープです。見つけにくい物ですか～。見つけにくいです。這いつくばって這いつくばっていったい何を探しているのか。ロープです。探すのを止めたとき見つかることもよくある話で。はい、今、見つけました。と延々と繰り返す。ちなみに、川沿いを歩くと美空ひばりの「川の流れるように」がループするのだが、みなさんはこんな事ありますか？

登山開始から3時間13分とあるピークに到達。一応写真を撮ったが、どこなのか分からない写真。3人しか写っていないけどちゃんと4人います。

このペースでは予定したルートは時間も体力も危な

いかもしれない。今日はこちらまでとし来た道を引き返す。谷から吹き上げてくる雪混じりの風がとてつもない。1時間前に通ったのに踏み跡はほとんど残っていない。大平山山頂には登山開始から4時間10分で戻ってきた。



ここからは一気に登山口目指して降りる。雪が膝下まであるのでとても歩きにくい。試しに転がって降りてみると意外と快適。何度か繰り返していると背中が「バキッ」と音がした。骨が折れたわけでもなく、怪我したわけでもない。ザックの中には重りで入れた2リットルのペットボトルが3本。ペットボトルが割れた音だった。よく考えると、もし、ペットボトルが割れたら自分が水浸しになる。それはまずい。もう転がって降りるのは止めよう。登山開始から約5時間で全員無事に下山完了。とても楽しい一日だった。そう言えば、矢上会員、「楽しい～」とずっと叫んでいた。

参加者…山岡、矢上(新会友)、田所、(友人1名)

- 追記1) 火事になった建物はバイク屋だった。
- 追記2) 沖縄や台湾でも雪が降った。奄美大島では115年ぶりの雪。
- 追記3) 翌日は足ではなく腕が筋肉痛になった。(這ったり転がったりしたから)

個人投稿

より安全な登山のために NO20

『鶴見岳で奇妙な事故・登山計画書(登山届)』

安東桂三 (9193)

今年の2月初旬に奇妙な遭難事故が起こった。熊本からやってきた男性が山から帰らない、と家族から捜索依頼があった。その依頼も登山に出かけてから約1週間たってからのことだった。登山目的は鶴見岳と言う。警察ではどこから登ったか？登山届は提出しているか？と調査した。同時に大分県遭難対策協議会(遭対協)の隊員や別府署員、大分県警機動隊山岳救助隊などが鶴見岳の一般ルートを探した。本人の携帯電波の発信場所は、石楠花尾根

方向からとも判った。また調査の結果は、バスでやってきて、由布岳登山口のバス停を8時30分頃に下車したことが判明した。良く判らないのが鶴見岳に登るために、由布岳の登山口で下車したとのこと。由布岳に登って東登山口に降り、鶴見岳へ登り返したか？日向岳自然歩道を歩いて鶴見方面へ向かったか？とにかく理解に苦しむところ。

そのうちに、内山から大平山に向かう石楠花尾根の途中で男性のメガネと帽子が発見された。そこで、その周辺の谷などを捜索したが見つからず。一週間たって捜索範囲を広げると、そのメガネや帽子があったところより内山寄り(上部)で男性が見つか

った。登山に出かけてから約1ヵ月後のことであり、当然亡くなっていた。メディアやネットでの報告がなく、詳細は解らないが奇妙な山岳遭難事故であり、残念な結末となってしまった。

まず登山届を提出していればと悔やまれる。登山届(登山計画書)を出していれば、早くに解決、もしかしたら、生還できていたかもしれない。登山届は登山口で提出するものと、家庭や友人や山岳会などに提出するものとの2通が必要。私はもう1通、持参用にと、計3通を準備するように薦めている。

一番重要なのは2通目。家庭や友人や山岳会に提出するものが生死を分ける登山届と考えている。例えば、朝山に出かけて夕方5時には帰宅すると計画していれば、夜7時になっても、8時になっても帰ってこなければ即、どうしたものかと連絡を取ったり、登山口まで出かけて見たり、警察などの機関へ相談したり(捜索依頼をしたり)と行動を起こせる。

1通目の登山届は、登山口のポストに入ったままなので、何か必要なことが起こらなければ警察など

隊員が自費を投じて、固定ロープの設置やルート整備をした。

本会東九州支部でも登山届の提出を義務づけている。3月27日には支部月例山行で長崎の郡岳に登った。私が担当であったので登山計画書を作成し、事前に支部長と事務局長に提出していた。そして、下山後大分に帰る途中にて、携帯メールで下山報告をし、さらに自宅に帰りついてパソコンメールで、下山届を送った。何かが起これば、支部長と事務局長を始めとする支部メンバーが対応してくれると安心して月例山行が行える。

ちなみに、先に記述した登山届の3通目は何のためかと言うと、何か現場(途中の行程を含む)で起こった時に使う届。もし負傷でもして、他人に(他パーティに)伝令を依頼する場合に、届の当事者(要救助者)に赤マークをして渡す。携帯があるからそんな必要ないと言われるかもしれないが、携帯電波の届かない谷間とか、山奥とか、そのような場所は多い。

もし事故がありこの人は誰かとなったら、届けをみれば一目瞭然。届には緊急連絡先も書いてある。本人に聞けば良いと思うかもしれないが、怪我した本人が喋れない場合もある。そのような状況が必ず一生の内に数度ある可能性があるため、3通の登山届を。

また本会支部役員会では、個人山行の登山届に関しても議論があった。結論は強制ではないが登山届の提出を推進しようと決まった。私はこのような山仲間がいる支部をありがたいと思う。最後に登山届を出したら下山届を。子供が親に『行ってきます』と言って出かけたなら、『ただ今、帰りました』と無事帰宅を言うように。



の機関は調べない。でもこれは出しておかなければならない届。もし登山届から個人情報もまれて悪用されると心配する方は、登山エリアの警察の地域課に郵送なりメールなどで送っておけば良い。

とにかく、誰かが予定通り帰らないと心配してくれるような状況(留守宅)が必要だ。上記の鶴見岳の場合は登山届が提出されていたか否かは不明だが、たぶん提出されなかったと推察。そして無事帰宅を心配するシステムも無かったと思う。

遭難があった2月と捜索した3月は積雪があったり、雨が降ったりと気象変化が激しかった。石楠花尾根はルートが悪く、捜索の遭対協の隊員もルートミスすることがあったと言う。その後その遭対協の



(登山口の登山届箱)

ペンリレー・第20回

自然との出会いを求めて

木本義雄 (12019)



最近是中老年登山がブームですが、いつのまにかその一人になってしまいました。私が育った頃の別府市は市街地も緑が多く、生家からは裏山を間近に望むことができました。学校帰りに裏山に登ったり、岩場をよじ登ったり、川を遡行したりして遊び、夏休みには毎年奥別府の城島・志高湖でキャンプして鶴見岳・由布岳に登るのが我が家の恒例行事でした。

山好きだった父について山に登っているうちに、だんだん山に興味を持つようになったのではないかと思います。一緒に登った山岳会の大先輩たちから山の歴史や動植物についての話を聞くのがとても楽しみでした。海運会社に就職していろいろな国々を訪れるようになると、いかに日本の自然が豊であるかを痛感し、また日本の山を歩きたいという思いをずっと抱いていました。その後東京での陸上勤務となったので、山登りができるようになり、また自然に触れる喜びを味わうことができました。

山に登るのは、外国の港に入港する前に港湾事情や海図で地形を調べると同様に、登山の場合は地図から地形をイメージし、コースや植生、最近の気象等も調べるため船の仕事に似たところがあります。また、山に登ることにより人との出会いも増えて、北は北海道から南は台湾の方まで知人ができ、山の情報交換の場も増えました。

最近、登山者が増えるにつれて自然が荒れているのを目にします。私の山登りは「自然を愛し自然に親しむ」をモットーにしたいと思っています。今年の夏は、家族や山仲間と奥日光を歩き北アルプス・南アルプス周辺の登山を計画していますが、これからも自然に触れ合い、新しい発見を求めて山登りを続けるつもりです。

(平成9年・船員保険広報誌に寄稿した内容です。暫くして親子3人で山岳会に入会しました。)

今回のペン・リレーは、西あずさ会員(12347)にお願いしました。お楽しみに。

雁股山城と周辺の三角点

三角点と山城探検シリーズ第17回

安部可人 (友11)

1. 雁股山登山 今回は、耶馬溪ダムの北方面です。30数年前、高校の秋季登山大会は檜原山(幕営)～雁股山～経読岳～ウグイス谷～鳥居畑(幕営)コースでした。イリノイ洲からきたSam君と2人遅れて最後を歩いたのが懐かしい。最近雁股山西峰に山城跡の遺構があると知り早速でかけました。10号線は宇野で109号へ南折して、雁股峠のトンネル前に駐車します。峠から高度差300m距離1.6kmは私の体力の限界に

近い。真冬のある日3月並のの天候低は7℃。2次林・落ち葉・木漏れ日の自然歩道は、高度600mから高度差50mがキツイ登りだが、ベンチから400m区間はクヌギなどの冬枯れ樹木の緩い幅広尾根となって



素晴らしい(写真)。

感じのよい二等870.1の山頂に満足、目前の西峰山



城は止めました。翌日登った佐藤君の報告では、”矢穴”(矢狭間・銃眼)は崩れて4mの石垣だったそうです。南の津民に長岩城があって、雁股城

はその支城という。”矢穴”が共通します。(H27.1.24実行)。

2、地点名扇山 4等530. 7 長岩城 永岩小学校前に大案内板。容易に登れて、鉄平石の石積櫓・石垣30mが見事です。本格的な遺構はナベト谷の東側、険

阻で危険な為老人には無理です。大分県一級の山城で



す。最後の城主野仲鎮兼は宇都宮一族の名門です。黒田如水・長政に対抗した「検地反対の”豊前国人一揆”で宇都宮鎮房以下と皆滅びました。矢穴・銃眼は写真のように残っています。

3、地点名無戸 3等 556. 4 高城 ダムの尾ヶ篠から上がり、碎石場の上の広場に駐車する。崖の数本の手すりつき階段は破損して、

一番手前の低い安全な階段から482ピークに向かうが、小石と落葉の強烈な斜面をクリアできず、リタイアです(同行の佐藤は実行、遺構無し)。

4、地点名城山 4等364. 5 一ツ戸城 道の駅「やまくに」あたりで道路わきにひどく目立つ恐ろしい切り株山を見ます。登れそうにみえません。山城を知らない8年前、南側神谷から45分もかけ登った記録があります。民家の間から植林の超急登、やや危険です。説明板の横からゲートを入る北コースもキツイそうです。

5、白米城址 120 平田城 梅木秀徳さんの山岳一覧に緯度経度が記載されています。212号線の耶馬溪高校の近くの道路ぞいです。野仲氏家臣の平田氏の城。野仲氏滅亡後、黒田官兵衛は耶馬溪6000石と平田城を重臣栗山利安に与えました。栗山氏は長政と仲たがいがほしいらしい。後藤又兵衛も18000石益富城を出奔して浪人となっています。

烏帽子岳3等532. 1、惣見山3等441. 0、がお勧めです。尾山3等749. 9は超急斜面の為実行していません。耶馬溪の3等はまた相当残ってもう無理です。光岡城は公園化され、遺構が素晴らしい。地形図…下河内・耶馬溪西・耶馬溪東

(写真・藤沼博撮影)

私の無名山ガイドブック N060

狼岩(740.3m)・ウツエ(627.5m)

飯田勝之 (10912)

奥岳川源流域の三角点

奥岳川の源流域の三角点のある小ピーク。今回は次の2カ所を紹介しよう。

狼岩

実に恐ろしい地名である。しかし、登ってみれば実に穏やかな丸い小丘だ。祖母山から北東に延びる長大な障子尾根は前障子の岩峰から二つに分かれ、主稜線は北西に向きを変えて大きく曲がりながら倉木山から烏岳へと続き、もう一つの支稜線が北東方向に高度を下げながら延びていって、やがて奥岳川へと落ち込んでいく。その支稜線が急に高度を下げる手前の小さなピークがこの狼岩の地点である。名前の由来は上畑の集落から見上げるとこのピークの西側斜面に岩が見えるが、その岩を指しての呼称と思われる。

上畑の建男社の手前から、民家の横を通って前障子に登る道を行くと、砂防ダムのすぐ上で大きく左カーブし、そこに前障子への指標もある。その指標の横から道を逸れて、カヤを分けて登るとすぐ上に右から登ってきた作業道に出会うが、この道は右上50mほど上で消えてしまう。これを行かずに左上スギ林の斜面をほぼ直登していく。かなり急な登りが続き、25分ほどで平らな稜線に至る。すぐ先がまた急な登りとなり、そしてまた平らな広い稜線となり、少し行くと次第に傾斜が急になり、落葉樹の灌木林の中の登りはいっそう急な斜面となる。猛烈な急斜面を木の枝や幹にすがりながら20分ほどあえぎ登ると鈍頂となり、木々のまばらな明るい疎林の中央に、北東角が大きく欠けた3等三角点がある。まわりは落葉広葉樹の灌木林で、クヌギ、ナラ、ハゼ、ヤマザクラ、ヒメシャラ、イチイ、アカマツなどが見られ、40mほど南はヒノキ林の急斜面となっている。



地形図…25000分の1「小原」 参考タイム…前障子登山口→25分→手前の稜線→25→三角点

ウツエ

祖母山から北東に延びる障子尾は、前障子を過ぎて倉木山に至る手前で大きく二手に分かれており、東方

に分派する支稜線は緩いアップダウンで高度を下げながら、栗林の集落を通過して奥岳川に落ち込む。その手前の高度500mを切る直前の小ピークがこの地点であり、ここから稜線は一気に高度を下げている。

稜線の斜面はほとんど植林地だが、このピークのまわりは天然林で、アカマツが多く、カエデ、シデ、リョウブ、ムク、エゴ、ウリハダカエデ、アセビ、ソコゴなどが見られる。

県道緒方高千穂線の栗林の神社の先から登る林道を行くと400mあまりで終点になり、その上は作業道が続いている。その作業道のかかりから左の稜線にとりついてまっすぐ登るとよい。途中で二度作業道を横切りまっすぐ登り、シカ避けのネットをくぐって行くと天然林の稜線登りとなる。山頂から東に延びる稜線で、ひたすら登ればネットから15分あまりで山頂に達する。栗林の先の小河内林道に入り、県道から500mほどの所から右に、ヒノキ林を直登して、山頂から東の稜線にいたることもできる。

地形図…25000分の1「小原」
参考タイム…林道終点→45分→三角点



(地図・上がウツエ下が狼岩)

会務報告

役員会

- 第6回 2月17日(水) コンパルホール
平成27年度事業報告・会計報告計画(本部提出書類)
平成28年度事業計画・定期総会の議案審議ほか
- 第7回 3月30日(水) コンパルホール
平成27年度事業報告・決算報告
平成28年度事業計画・予算計画等定期総会議案審議ほか

本部報告及び申請

- 平成28年度事業計画及び予算書提出 1月8日
- 平成27年度事業報告書提出 2月20日

平成28年度「特別事業補助金」申請書提出

(青年部活動への補助) 3月6日

平成27年度決算報告書提出

3月24日

「山岳」2016年・VOL111

「支部の活動報告」原稿提出 4月20日

慰霊登山

土屋多喜子

昭和5年久住山初の遭難死若き二人の慰霊登山今日
八月の嵐の夜と飢えと寒さに此処に果てしと碑文の文字
山好きの若者二人が最期に見しは輝きわたる山頂の碧
法華院より登り来し僧曇采めの僧衣の下は山ズボンより
なだりに盛る空木の白花と供花となし
読経に始まる慰霊の儀式
見の限り深き緑にノリウツギの白花は清し深山に永久に
慰霊碑の前に広がる弁当と共に食べませ握り飯ひとつ

お知らせ

月例山行のご案内

5月月例山行:立花山(376.0m) (福岡県・新宮町)

- 日時…5月22日(日)
- 出発…5月22日(日) 午前6時00分出発
- 集合場所 大分駅上野の森口広場
- 装備…日帰りハイキング装備
- 参加申込は5月16日(月) までに
- リーダー:中野稔(097-543-3903・090-2712-5225)まで

6月月例山行:比叡山(760m) (宮崎県・北方町)

- 日時…6月12日(日)
- 出発…6月12日(日) 午前6時00分
- 集合場所…大分駅、上野の森口
- 装備…日帰りハイキング装備
- 参加申込は6月3日までに
- リーダー:木本義雄(097-551-9117・090-1465-5696)まで

7月月例山行：虚空蔵山(608.5m) (長崎県|柳井)

日時…7月17日(日)
 出発…7月17日(日) 午前6時00分出発
 装備…日帰りハイキング装備
 集合場所 大分駅上野の森口広場
 参加申込は7月10日までに
 リーダー：久保洋一(090-8353-9770)まで

特別報告

第10回韓国山岳会蔚山支部との交流登山

飯田 勝之 (10912)

日韓交流登山が去る3月19日(土)から22日(火)まで韓国の蔚山市郊外の嶺南アルプスでおこなわれた。日本山岳会東九州支部と韓国山岳会蔚山支部との日韓の岳人交流としては11回目、交流登山としては10回目の今回は、当初は昨年秋に実施の予定であったが、韓国国内で流行していたMERS(マーズ・中東呼吸器症候群)の感染を避けるため延期していたのである。

2005年(平成17年)10月に韓国蔚山広域市の韓日親善協会一行が別府・大分に訪れ、同6日に大分市役所を表敬訪問した時が縁の始まりである。訪問団の中に韓国山岳会蔚山支部会員が多くいて、大分県の山岳クラブとの交流をしたいとの希望が出され、市から東九州支部にその旨の相談がもちかけられて急遽交流会がもたれることとなった。

交流会は翌7日、コンパルホールで開かれ、韓国山岳会蔚山支部会員8名、日本山岳会東九州支部会員12名が参加。互いに状況を交換しあった、これが第1回交流会である。その席で今後も互いに交流を続けていこうということになり、具体的には双方交互に隔年ごとに訪問し、毎年交流会と交流登山を重ねようということによって一致。翌年(平成18年)に韓国山岳会が訪問団を派遣、当方が迎えることとなり、筋湯温泉で第2回岳人交流会、久住山と大船山で第1回交流登山を実施したのが始まりだ。

平成28年度支部会費の納入について

定期総会で今年度会費を納入された方以外には、別途封で「払込取扱標」をお送りしていますので、郵便局窓口で払い込みをお願いします。なお、ATMにて払い込みされますと手数料が格安になります。

なごやかに賑やかに交流会

今回の訪韓団の参加者は22名と過去最高の人数となった。一行は19日早朝大分を出発し、午前10福岡港国際ターミナルから高速船ビートルで出発して午後1時に釜山港へ到着。蔚山支部の李建旭顧問と奥さんの金淑喜夫人ら一行が出迎えてくれた。

手配を依頼しておいた貸し切りバスに乗り、まずは蔚山へ向かう道すがらの観光で、韓国屈指の海辺のリゾート地「海雲台」へ。高級ホテル街と海岸を眺めたあと蔚山へ向かい、市の南端にあって韓国で一番最初に日の出が見られるという「良絶岬」へ行く。岬の展望台から遙かに広がる日本海を眺めていると、「その向こうは日本の山口県ですよ」と李さんが教えてくれた。あとで地図で確かめると下関市の角島が隣の島根県川尻岬のあたりだ。

岬の展望を楽しんだあと、バスは今日の交流会と宿泊の場所へと向かう。蔚山市の郊外を通り高速京釜道の下を通る。この道は京城から大田、大邱、慶州を経て釜山に至る高速1号線で、我々訪問団が何度も通った道である。この道をくぐると前方に見覚えのある山並みが横たわる。嶺南アルプスの稜線で、中央にひととき高いのが9年前の初回訪問時に登った、連峰の主峰伽智山(伽智・1241m)である。田園風景の中を山に向かって走り、伽智山麓にある名刹石南寺(初回訪問時にお参りした寺)の前を通り、カーブの多い登り坂にかかる。

どんどん上っていき峠を越える。梨川峠(ベネゴケ)で、この峠は明後日まであと3回通る予定で、初回の嶺南アルプス縦走時の1日目の下山口、2日目の登山口であったし、二回目訪問時の天皇山(杵ヶ崎)・戴梁山(杵ヶ崎)に登った時にも往復した峠だ。峠から下り、天皇山への登り口を右に分けてさらに下って行くと今

宵の宿に着いた。San Go Eul Garden というロッジだ。

宿の前で蔚山支部会員の歓迎を受けた。大部屋三つのロッジで蔚山支部が泊まる中の部屋を挟んで、手前が女子10名、奥が男子12名の部屋で、男子部屋はやや狭苦しい感じだが、値段から見て苦情は言えない。

(蔚山支部の男性は外でテント泊だ)

午後6時から交流会の開始。蔚山支部の参加者は27名、東九州支部22名であまり広くない部屋は満杯状態。韓国の若い女性会員で日本語に堪能な李姓炫さんが通訳してくれる。最初に趙昌培蔚山支部長の歓迎挨拶、次いで加藤支部長のお礼の挨拶のあと乾杯。蔚

(挨拶する加藤支部長)



山支部からのたくさんのみやげ物や差し入れが披露され、当方からのささやかなお土産として、保冷バッグとペンライトを人数分差し上げる。それに担いできた日本酒二本も。あとは美味しく馳走とお酒で、宴たけなわになると宮本さんが太極拳扇、阿部さんが日本舞踊をご披露で大きな拍手だ。さらにそのあとも賑やかに交歓が続いた。

億山(オクサン・944m)へ

20日(日) 晴のち曇

朝食は7時00分から、8時30分に迎えの車がきた。ベネ峠へ引り返し、少し下ったところからまたその先の峠を越えて下っていく。広い谷間の斜面にはリンゴ畑が広がる。韓国一のリンゴの産地だ。この谷は3回目の交流登山で雲門山(ウモクサン)に登る時にも通ったところだ。

やがて雲門山への入り口に近づく。前回 は乗用車で奥まで入ったが、道が狭いのでバスは入れない。そこから舗装道を歩くこと15分あまりで、やがて見覚えのある滝の横についた。滝のすぐ上に寺があり前回にもお参りした石骨寺だ。

登山口で写真を撮って出発。9時30分。少し行くと雲門山への道を右に分ける。谷に沿って緩やかな登り

(石骨寺前の登山口にて)



がつづく。

ゆっくりペースで30分ごとの休憩。登りはじめて1時間半、谷沿いの道からいきなり急斜面のジグザグ登りとなり、30分ほどで稜線に登りついた。ここは八風峠という、雲門山から連なる稜線で、縦走路となっている。左手には巨大な岩壁がそびえる。この岩の上がめざす最初の山「億山(オクサン・944m)」だ。岩壁の裾を巻いてジグザグ登りで山頂に着いた。12時10分到着。



(億山頂にて)

中国からの煙霧のせいで、やや霏っているものの、薄曇りの天気です360度の展望は抜群だ。山頂横の露岩の広場に思い思いに陣取って、宿舎で渡された弁当を開く。食事のあと、山頂の標識石のそばで記念写真を撮ってさあ出発。時刻は12時55分になっている。

李顧問が「九萬山まで行きますか?」と言う。わが会隊員の疲労具合を見ての問いかけだ。日程と時刻をみるとちょっと危うい。縦走路途中の垓峠からの下山を提案したが、ちょっと難路だとのことだ。高齢者集団の我々にとってはこのまま下山が適当だろうと、下山を決意。通訳の李姓炫さん「あらっ、九萬山にはいかないの?」具前支部長ら韓国メンバーの数名はそのまま縦走路へ入っていった。

我々一行は山頂から稜線歩きのと岩峰の分岐路へ着く。ここから下りだ。かなりの急斜面を下っていく。一旦緩くなりまた急斜面。どんどん高度を下げていく。常緑樹のほとんど見あたらない山で、まだ冬枯れたまま

の疎林の中の道は快適だ。

しかしくだんの李姓炫さん、あまり山慣れしていないのか、下りに膝が泣き出したようで、旦那さんの肩にもたれて下っていた。途中で二回休憩して、約1時間で登り口の石骨寺に着いた。寺にお参り、そして下の沢に下って滝をバックに記念写真。そのあとは朝来た講道道を引き返し、午後3時に駐車地点へ、ロッジには4時前に帰着いた。



(石骨寺下の滝をバックに)

あとはすることがない。韓国からももらったたくさんのみやげを分けて、そのあと、蔚山支部が帰ったあとの空いた部屋を借りて、手狭だった男性は二つの部屋に。そこで二部屋に別れてまずはビールで宴会。6時から夕食。また乾杯。マッコリ売れ行きが良い。夕食後はまた二部屋に別れて宴会の続きだ。

高献山 (コウンサン・1033m)

21日(月)晴

今朝は7時半の朝食で9時に迎えのバスがきた。一昨日から3回目の通過となるベネ峠を越えて下っていき、石南寺前を通り途中で、初回と二回目の交流登山の時に泊まったロッジのある雲門山自然休養林への道を左に分けて、蘇湖里の谷を登って行き、やがて登山口の外頂峠へ着く。

ここは海拔540mで1033mの高献山まで500弱の登りで、今日の登りうんと楽のようだ。9時45分出発。最初から緩やかな登りで始まり、ずっと緩やかな登りが続く。日本の黒松に似た樹皮で、まっすぐ立って、やや広い松葉の針葉樹林の中を登っていく。そして、日本と同じアカマツ林の中を登り、クヌギの多し林を登り、そしてカヤ野の中の登りに変わる。30分ごとの休憩で快適な登りが続く。薄日の射す昨日と違い、今日は

真っ青な雲一つない青空だ。みんな元気で快適な楽しい登りである。

11時40分に西峰につく。少し下って緩く登った向こうに平らな山頂が見えが、こっちの方が高いように見える。ここで全員集合写真を撮って一旦小さく下り、木の階段を長く敷き詰めた緩斜面を緩く登り終わると、広々とした高献山(コウンサン)山頂だ。12時5分到着。抜けるような青空の下、ゆっくりお弁当休憩。



(高献山西峰で東九州支部のみ・なぜか金、林西夫人がいる)

写真も撮って、13時下山開始。下方に見える高献寺に向かって直降下道だ。クヌギの純林の明るい斜面を真っ直ぐ下っていく。

途中二回の休憩で2時20分に標高370mの高献寺につく。天気良すぎて暑い。お寺で待っていると迎えの車がきた。ここで、我々を蔚山のホテルまで送る、荷物運搬の車3台のほかの蔚山支部メンバーとはお別れだ。次回の再会を約して「アニョヒ・カセヨ」。

今宵の泊まりは蔚山市内のホテルだ。バスは市内に入り、大きな竹林公園の横で白まった。まだ時刻が早いので李顧問が時間つぶしを考えてくれたのだ。大和江大公園という名の広大な敷地が全て竹林だ。モウソウ、マダケ、ハチクそのほかいろいろ竹があり、全て綺麗に手入れされている。約1時間の散策でバスに戻り、一旦ホテルにチェックインして今度は夕食会場へ。当方の注文で肉料理の店へ行くのだが、ホテルから15分ほどのやや郊外にある食堂で韓国の肉料理を頂く。

蔚山観光と焼き肉

22日(火)晴

ホテルと朝食は韓国流のビュフェだが、パンやおかゆもあった。9時に李さんと曹さんと、それにバスが来た。いつも李さんと一緒に世話をしてくれる金夫人は今日は仕事だという。皆の希望で出発前に、李さんに昼食は

釜山で焼き肉を食べたいと希望したら、釜山じゃなくて途中で美味しい店があるという。

その前に案内されたのが蔚山大公園。その名の通りとても広い大きな公園で韓国一の広さだそう。SK財閥が市に寄贈して、市が管理しているとのこと。約1時間半、地図で見ると公園の3分の1程度を見たことになる。そのあとバスついたのですぐ隣の蔚山博物館。古代の遺跡から、韓国の歴史、近代の産業発展の資料や展示物が並べられている。工業で発展したこの都市の財政的や豊かさを感じさせられた。

博物館を出たのが11時半。市街地を抜けて昨日高叡寺から蔚山へ通った道を通り、郊外の焼き肉の店が建ち並ぶところについた。ここで焼き肉とビール。

そのあとは一路釜山へ。約50分のドライブだ。13時30分着。チェックインして李、曹両氏とお別れの挨拶をして、出国検査へ。定刻午後3時ちょうどに釜山港を出港。来る時とは違ってかわってのどかな玄界灘。滑るように水中翼船は走り、定刻5時55分福岡着。駅で弁当を買って19時29分のソニックで全員一路大分へ。参加者・加藤英彦、星子貞夫、飯田勝之、石神美智子、阿部幸子、櫻井依里、宮原照昭、工藤吉子、若月美智子、土屋多喜子、渡部昭三、木山広喜、宮本真理子、尾家暁夫、飯田修三、清水道枝、雪野左喜子、大渡崇夫、相良正浩、飯田ひとみ、飯田佳子、今川三弘

参加者の一口感想

このたび参加の全員の皆様から、一言ずつ感想を送って頂きました。

加藤英彦 (8765)

古来ことわざとして「井の中の蛙、大海を知らず」とか「可愛い子には旅をさせよ」とかある。「旅」をするということは広く見聞をひろめることであろう。それが海外の旅ならなおさらその旅するものにとっては有意義なひと時となる。日常的な環境からわずかな期間であっても非日常的な状態に置くことによってまた違ったひと時での感じる事が多い旅であったであろう。

今回もまた異国の人の心のこもった歓待をうけることとなった。そしてそれは次回迎える時ほどどうしてもそれ以上の気持ちをあらわさねばならないと思った。

今回過去にない大勢(22人)で出かけたがこの数が微妙に多い数であった。行きのJRの指定席の割り振りからA班、B班の班別の分けかたといひ、ロッジ

での部屋分け(男)12名(女)10名そして最後のホテルでの部屋割といひ、すべて偶数の人数でうまくいったということです。メンバーが最高でした。皆さん満足されたことでしょう。

星子貞夫(8582)

3月19日~22日、韓国大白山脈の南端、嶺南アルプスの億山、高叡山の登山に参加した。好天に恵まれて、寒くもなく春先の木々の芽吹き前の疎林を、落ち葉を踏みしめて歩く山道は日本の里山のようなのどかな山旅でした。高齢の為に皆に遅れての山頂着であったが、李氏のサポートで無事完登出来たことを感謝しています。

この地方は大戦前よりリンゴの産地として子供心に記憶がある。今も美味しいリンゴが多く収穫出来るようである。釜山は少年時代6年間過ごしたが、地図で昔の地名を確認したが町の発展はずさましく、場所の確認は出来なかった。蔚山の公園は広くて美しく流石にヒュンダイの城下町である。韓国岳人のおもてなしに感謝します。

飯田勝之(10912)

あの顔、この顔、あの人、この人、もうすっかり馴染みになった顔、顔、顔・・・ところが、いまだにその人たちの名前を判然と出来ない。でも対面して、握手して、ハグするともうそこには言葉なんか要らない。ただ親しみと、懐かしさと、再開の嬉しさ、友愛の心。

今度来たらそのお返ししなければとは思わない方がいい。なぜならあの人たちは、お返しされようと思ってもてなしてくれているんじゃない。自分たちのおもてなしの心の発露だ。だからこんどあの人たちが来たら、お返しするんじゃなく、我々がどんなもてなしができるのか、心の発露を見せるだけだと思う。再開が楽しみだ。

石神美智子(14649)

- ① 第1回目と今回5回目の訪韓交流に参加し感慨深く思いました。
- ② 登山と蔚山でも観光で特に竹の公園の素晴らしさと大公園の広大さに驚きと感激で心に残りました。
- ③ 億山から九萬山への縦走が時間不足で出来なかったことに少々心残りがありました。
- ④ 高叡山から見た加智山に感激しました。(一回目の時の登った山なので)

蔚山や 彼方の空に 伽智想う

- ⑤ 韓国の皆様の心からのもてなし特に李・金御夫妻の気配りともてなしに心から感謝します。

⑥ いつまでも素晴らしい交流が続きますように願っています。

阿部 幸子(15032)

日韓交流登山は天候に恵まれ、回を重ねるたびに再会の喜びと嬉しさでいっぱいでした。徳山と高嶺山は自分のペースで登り、ゆっくりで遅くなりましたがいつも蔚山支部の方が傍でフォローしていて、安心して登る事が出来ました。

頂上で遠くの山々を眺め、清々しい気分で昼食を取り、蔚山支部の方には色々美味しい差し入れの蒸し米やコーヒーを頂き、心も温まりました。食事の時は李先生ご夫妻が、自身の食事を採る暇もなく私達のお世話を頂き、本当に有難うございます。

何種類もある竹林公園の竹、蔚山大公園のストレッチの機具は大分にもあったらしいと思いました。



(写真は踊りを披露する阿部さん)

櫻井 依里(15643)

海外登山が出来たのは山岳会に籍をおいたお陰と、会の意義を再認識させていただきました。また、おもてなしの気持ちは国や人種が違っても同じ思いであることに気づかされました。今度韓国の方のおもてなしは、相手側に習い全員で事に当たりたいと思う次第です。

宮原 照昭(15683)

初めて韓国登山なのでわくわくして行くことになり、噂では韓国の山は低いと聞いたが実際「徳山」に登って見たが、日本の山に似ているような感じがしました。登山道きれいに整備していたし頂上は景色も良かった。釜山港から李顧問をはじめ各支部員たちがいろいろお世話になり最後まできめ細かくしていただきまして、今年に大分に来たならば積極的に参加して細かくお世話をしていきたいと思ひます

工藤 吉子(15689)

今回初めて韓国との交流登山に参加しました。どんな山に登るのか、上手く交流できるか不安な気持ちで参加しました。出迎えを受けて不安は一挙になくなりました。交流会や食事会・登山と心配りのおもてなしにびっくりで、感謝の気持ちで一杯です。

今年の秋には韓国の方が大分に来られる予定とか。私たちは韓国のようなおもてなしは出来ないが、心のこもったおもてなしをしなくてはと、痛切に感じた交流登山でした。その為には交流会準備委員会を立ち上げて、東九州支部としてのおもてなしを考えています。個人として何が出来るか判りませんが、積極的に協力をして、韓国の参加者を心のこもったおもてなしでお迎えしたいと思います。今回交流登山のお世話して下さいました皆様にお礼を申し上げます。本当に有り難うございました。

若月 美智子(15735)

今までの韓国人へのイメージが大きく変化した旅となりました。彼等のホスピタリティはとても親日的で、おせっかいに手作りお菓子や巻き寿司等をたくさん頂きカムサハムニダ。

また、釜山・蔚山の街並み、交通事情、焼き肉・キムチ等の食文化に触れ益々韓国について興味が増してきました。登山道はよく整備されていて心地良い山歩きが出来ました。

さて今度は、私達がホストになりお迎えする番です。

土屋 多喜子(15827)

初めての韓国、初めての交流登山だった。自分が何となく想像していた韓国と、実際訪ねて目の当たりしたその国との差は大きかった。まだまだ発展を続けていく勢いも感じられた。

今回で10回目を迎え、毎年参加していると言う人も居て、親しくなった韓国人との再開を喜ぶ姿もあちこち見られた。交流会では、蔚山支部の方々の連係プレーの効いたおもてなしに感動。私たちがお迎えする時どんなおもてなしで応えたら良いのかと不安になる。とにかく歓迎の心を尽くそうと強く思った。

今日登る 韓国の山吹く風は木々の緑より爽やかな白

韓国の交流登山の記念写真は

「ワン、ツウ、スマイル」笑顔輝く

渡部 昭三(会友1)

75歳を過ぎた頃より年々体力の衰えが目立ち、登りで息切れすることが多くなった。今回の韓国の山行も自身がなく、迷惑をかけるのではないかと考えたが、初回から連続で参加してきており、あえて参加を決意した。

1日目の徳山では石骨寺まではどうにかついていけたが、それから後は次第に遅れてしまい、とうとう八風峠の下で引き返すことにした。2日目の高嶺山では何かなんでも完登をと決意して登った。しかし私一人

が次第に遅れてくるが、この日も曹さんがついてくれ、途中から金さんが私のザックを担いでくれ、ゆっくり登るよう励ましてくれた。木製の階段を登り詰め、やっと頂上に着く。「やったぞ、頂上だ」と大声を出す。曹さん、金さんと握手し抱き合う。

これまで5回の訪問のたびに、日本にはない韓国の岳友の心温まるもてなしと配慮に感謝してきたが、今回も同様で、心からの感謝と敬意を申し上げたい

木山 広喜(会友2)

初参加で楽しい交流登山でした。

白村江日清日露の舞台なる対馬海峡いよ渡りゆく
山小屋のオンドルじんわり暖かい薄き掛布をはたけて眠る
また一つ「チーズ」の合図も共通語韓笑顔の山頂撮影
ハーモニカ言葉無くとも通じ合う

アリラン吹きつつ山道下る

一面にくぬぎと松の植生で昨日登った蔚山の山も
各皿に青唐辛子は残り少しかつた跡を残して
白黒と長き尾を持つカササギは蔚山公園優雅に舞えり
屋上にヘリポートあり有事には滑走路となる釜山の道路は
熱いおもてなしに感謝しています。

宮本 眞理子(会友127)

釜山港までお迎えいただいた李先生、金奥さまの笑顔に再会の喜びをかみしめる。その夜の交歓会では皆で歌ったアリランの大合唱は圧巻であった。2日目、億山山頂からの嶺南アルプスの眺望も素晴らしく蔚山山岳会のメンバーと記念写真に収まる。

3日目の高献山にはそこかしこにサンシュウの芳しい花々がみられた。山頂での金さん手作りの韓国餅の美味しかったこと！下山した高献寺では無事に2日間皆で登山出来たことへのお礼を兼ねた参拝となる。今回も蔚山山岳会

の皆さまのここからのおもてなしに恐縮しきりの日々であった。又、参加された皆さまの一期一会のご縁に深く感謝です。(写真は太極拳扇をご披露の宮本さん)



尾家 暁夫(158)

蔚山支部との交流登山に参加して体験出来た事は私の今年のハイライトになるだろうと思っています。長年にわたり蔚山支部との交流登山実現に尽力頂いた加藤支部長、飯田事務局長に感謝致します。

飯田 修三(会友160)

韓国の方々とコミュニケーションを深めようと、韓国語のアンチョコを用意して事前学習したが、生来の記憶力の弱さから、結局「アンニハセヨ」と「カムサムニダ」だけとバントマイムに終始したのが残念であった。それでも過去2回の参加を通じてお互いに顔見知りになっていた方々もいて、懇親会や登山の折には親しく接することができた。次回は、ハングルのレベルアップを図ってより楽しい交流登山としたいと思う。

清水 道枝(会友177)

友達に誘われて余り乗り気出なかった韓国に初めて行った。韓国に対する印象はそう良いものではなかったから、ずーっと避けていた。

ところが行って、その思いは180度変わった。迎えの時、夜の宴、翌日の登山の差し入れや気配り、歩行のペースもゆっくり合わせてくれるなど、こんなにも全てにおいて気持ちよく接してくれる人々に感謝と感動を覚えた。

行ってみて本当に良かったと思える山行きでした。

雪野 佐喜子(会友182)

韓国の参加者は若者が多く元気。登山服もスリムでオシャレ。女性連はピアスも、わが方の参加者は平均年齢68歳とか。(引き上げたのは私ではない。)。韓国の皆さんに優しく守られながらの山行でした。韓国料理も汗をかきながらたくさんいただきました。クジラを避けながら進む高速船ビートルは揺れも少なく快適。韓国はとても近い国です。

大渡 崇夫(会友198)

昨年の登山入門教室を受講し、2回の実践山行と1月、2月の月例山行に参加させていただき、調子に乗って韓国山岳会蔚山支部との交流山行まで参加(連れてってもらい)しました。唯々、先輩諸氏の足手まといにならぬよう努力した山行でしたが、計らずや、初日の夕食後、隣のテント内で自分の人生観を変えるほどの熱いおもてなしを受ける幸運を得ました。今回の体験は、支部の組織と先輩方々の功績がすべてだと思います。ありがとうございます。

飯田 ひとみ(会友199)

第10回日韓交流登山に参加しました。初回から参加して、訪韓は今回で5回目です。新しくなった釜山港ターミナルでは韓国山岳会蔚山支部顧問の李建旭さんと金淑喜さんご夫婦が出迎えてくれました。特に奥さんの金淑喜さんと朴相年さんは文化センターで刺繍

の講師として多忙中なのに、私たちを笑顔で出迎え案内してくれました。親しいお友達に再開できて本当に嬉しかったです。

今回も、最初から最後まで韓国の方々の心のこもった、やさしいおもてなしに心を打たれ、癒された気持ちで帰国できました。有り難うございました。

相良正浩(会友200)

初めての訪韓でした。釜山は大分市位の都市と思っていましたが、人口300万人と聞いてビックリ。蔚山に至ってはどのような街かも知りませんでした。韓国の工業首都であり、人口117万人と聞いてまたビックリ。

山容は日本の山と大分様相が違っていました。落葉広葉樹と赤松が主体であり、日本に沢山ある常緑の広葉樹は見当たらない。火山灰の黒土がないので農業環境は日本より厳しそう。韓国山岳会の人々の温かい人柄に触れた旅でした。結局韓国のことを何も判っていなかったのだと思いました。

今川三弘(会友202)

私は韓国の山登りをするのは初めてで、蔚山支部の人々との交流会も楽しみにしていました。まず驚いたのは李会長の温かな眼差しでした。

そして山小屋に着いた夜、支部の人による歓迎会を開いてもらい和気あいあい言葉の壁はあったもののとても楽しい一時を過ごさせて頂きました。文化の違いといえ一言ですが、私は大変見習う必要があると感じました。

追記

蔚山支部との交流訪問団一行22名は、4月30日(土)大分市都陽町の第二食道園で反省会を開きました。席上、参加者が異口同音に語ったことは、毎回のことながら韓国の方々の、随所における心細やかな配慮と心のこもったおもてなしのことでした。そして、今度私たちがお迎えする時には、負けないようなおもてなしをしなければと言う声でした。

まだ確定していませんが、今年秋(10月または11月)には蔚山支部を大分にお迎えする予定になっています。具体的日程等が定まった時には、支部員の皆様にお知らせしますが、一人でも多くの方々が交流会と交流山行に参加し、賑やかに歓迎し、和やかに交流し、楽しく一緒に山に登りして頂きたいと考えています。

それがまた、このたびの蔚山支部のおもてなしに代える私たちの一番のおもてなしになると思われま

後記

- 韓国山岳会との交流行事も終え、滞っていたいろんな雑務も終え、ちょっと息抜きで孫の顔を見に関東へ出かけたついでに、帰りに近畿旅行。その帰り道、4月14日の夜は私はサンフラワーの船内でした。9時ごろ風呂に入って出たら、テレビを見ていた妻が「たった今熊本で大きな地震があったそうよ」と言った。帰宅後のニュースを見るとかなりの被害が報道され始めた。
- そしてその晩の午前1時20分前、大きな地鳴りと強烈な揺れ。驚いて飛び起きたが、二階に寝ていたので、我が家はこのまま崩れてしまうのではないかと考えたほどだった。幸いに家を壊す前に終わってくれたが、酒瓶が割れ、床をアルコール漬けにしたり、消火器が倒れ、なぜかそのはずみで勝手に消化剤が噴出して、台所は白い粉だらけ・・・その他・・・とまあ、熊本のひどい災害状況に比べれば笑い程度の被害ですんだが・・・。
- 16日の夜は支部定期総会の予定日。しかし、余震が続き、JRも一部止まり、高速道も不通、予定通り開催するのかと問い合わせや不安の電話も入る中、支部長と協議して急遽延期の決定。余震もなかなか収まらないなか、24日に予定していた京丈山へのカタクリ鑑賞月例山行も中止やむなきに。
- 今日、ここまで進んだ科学の力の中で、未だ予知できない地下の動き。まだ続いている余震、ただ、ただ一日も早く終息を祈るだけである。

(K・I)

公益社団法人日本山岳会東九州支部
東九州支部報 第73号
 2016年(平成28年)4月25日発行
 発行者 加藤英彦
 編集者 飯田勝之
 発行所 事務局
 〒874-0820 別府市原町5-14 飯田勝之方
 TEL・FAX 0977-21-3437
 Email jachigashi@leobbj.jp